

相沢 幹先生のご逝去を悼む



日本組織適合性学会の生みの親である相沢 幹先生は、平成 15 年 10 月 31 日急逝されました。ここに慎んでお悔やみ申し上げます。

相沢 幹先生は、昭和 22 年北海道帝国大学医学部を卒業し、その後北海道大学医学部第一病理学教室で研究、教育に従事され、昭和 40 年北海道大学教授に任ぜられました。23 年間の長きにわたり病理学第一講座を主宰し、研究に専念するとともに、多数の病理、移植並びに免疫を専門とする医学者、医師を育成されました。昭和 63 年同大学を定年退官されてからは、北海道公安委員会委員長の要職につかれるとともに、北海道組織病理学センター会長を勤められました。

相沢 幹先生の研究活動は、病理学・免疫学全般にわたりますが、最も力を注いだ領域は「移植の免疫遺伝学」と「主要組織適合遺伝子複合体」の研究です。

ラットを用いた心臓移植、腎臓移植などを広範にすすめ、移植の成否を左右する主要及びマイナーな組織適合抗原を解析し、拒絶の免疫学機構を明らかにしました。その後、ヒトの主要組織適合複合体 (HLA) の研究に着手し、HLA 抗原 Sa1 (現在の B54, サッポロ 1 番と呼んでいた) の発見、HLA-Dw15 ホモ接合体細胞 (LD-Wa) の開発、各種疾患と HLA 抗原との相関を明らかにしました。

日本の HLA 研究の歴史を話されるとき、いつも口にされていたことは昭和 47 年 (1972 年) サンタバーバラで開催された「HLA と疾患感受性」に関する第 1 回日米科学会議 (稲生綱政先生、D. B. Amos 先生が主催) に参加され、日本における HLA 研究の遅れを痛感し、研究の推進を決意されたことです (サンタバーバラの誓いといわれてました)。この時期を境に、ラット MHC から HLA 研究に力を注がれ、そして日本組織適合性研究会を推進すると同時に、文部省科学研究費による研究班「MHC の構造と機能」を組織して MHC 研究の向上につとめられました。

昭和 61 年に第 3 回アジア・オセアニア組織適合性ワークショップ、平成 3 年に第 11 回国際組織適合性ワークショップを主催されました。平成 4 年に 20 年あまり続いた研究会を現在の日本組織適合性学会へ発展させ初代学会長を勤められました。

相沢 幹先生は、卓越した教育・研究者であるとともに、音楽活動を続けられ、多岐にわたり人を魅了するお

話をされ、文化人として多くの人々から尊敬されておりました。北海道大学教授就任と同時に同大学の交響楽団の団長をされ、自らチェロを演奏して団員を指導しておりました。平成 15 年 11 月 6 日の故相沢 幹先生の葬儀は、北海道大学交響楽団が奏でるヴェートーヴェン交響曲第 7 番の荘厳な追悼の調べにのりすすめられ、校歌「都ぞ弥生」の曲で送られ、旅立たれました。享年 78 歳でした。

これ迄の相沢 幹先生の御研究を讃え、日本組織適合性学会の発展への多大な御貢献に感謝申し上げ、相沢 幹先生の御冥福をお祈り申し上げます。

日本組織適合性学会 監事

片桐 一